

視点

論説副主幹・豊田洋一



菅政権と学術会議

民主主義の「壊し方」

「民主主義の破壊者」は「民主主義の顔」をしてやって来る。菅義偉首相が、日本学術会議から推薦された会員候補の任命を拒否した経緯や政府側の説明を聞いて、そんな思いが頭をよぎった。今回の任命拒否は学問の自由を脅かすと厳しく批判されているが、議会制民主主義という観点からも到底、看過するわけにはいかない。日本学術会議法は、会員は

同会議の「推薦に基づいて、内閣総理大臣が任命する」と定め、政府は「これまでの国会答弁で会員任命が「形式的」であると繰り返し説明してきた。つまり、首相に裁量の余地がある」と認めないのが立法趣旨であり、国会審議を通じて確立した法解釈である。にもかかわらず、菅首相は

「推薦された方々がそのまま任命されてきた前例を踏襲していいのと考えてきた」と強弁した。形式的任命は前例で

とされた。こうした考え方は内閣府に置かれた学術会議事務局が二〇一八年にまとめた内

務文書に基づくとはいえない。しかし、この内部文書が過去に国会で説明され、審議された形跡はない。国会審議を経て、政府の内部文書のみで立法趣旨や法解釈を変更できないのは当然だ。首相の任命拒否は法的根拠を欠く。しかも、任命拒否した六人は、首相決裁の段階ですでに除外されていたという。任免

に基づく首相の任免権を侵害した「誰か」に対する厳しい処分を必要ではないか。菅氏が官房長官を務めた安倍晋三前政権を振り返れば、憲法や法律に忠実であるよりは、その抜け道探しに血道を上げていた印象が残る。歴代内閣が違憲としてきた「集団的自衛権の行使」容認に転換した憲法解釈変更であり、黒川弘務元東京高検検事長の定年延長を正当化しようとした国家公務員法を巡る法解釈の突然の変更である。その際に多用されるのが、憲法や法律の解釈を国会審議を経ず、一方的に変更する

ことで、法の趣旨を実質的に変えることである。表面的には憲法や法律に従う姿勢を見せる一方で、唯一の立法府である国会の決定を事実上、無効化する狡猾な政治手法だ。歴史を振り返れば、民主主義の破壊者は民主主義をいさなり破壊せず、形式的には民主主義の手続きを経て目的を達成しようとする。民主的とされたワイマール憲法を全権委任法によって骨抜きにしたナチスのドイツばかり、帝国議会を翼賛議員によって埋め尽くそうとした日本の軍国主義ばかりである。

コロナ Watch 1週間

トピックス

- 9日・マドリッド、非常事態宣言
- 11日・インド感染700万人突破、米に続き2カ国目
- 13日・GoToトラベル迷走、追加予算配分
- 14日・仏・パリなど17日から夜間外出禁止令

感染者数 (累計・14日現在)

	感染者数	死者数
1 米国	7,728,436	213,626
	+348,110	+4,839
2 インド	7,239,389	110,586
	+482,258	+6,031
3 ブラジル	5,103,408	150,689
	+176,173	+4,014
4 ロシア	1,340,409	23,205
	+91,790	+1,340
5 コロンビア	919,083	27,985
	+56,925	+1,141
6 アルゼンチン	903,730	24,186
	+94,002	+2,718
7 スペイン	861,112	32,929
	+35,702	+443
8 ペルー	851,171	33,357
	+21,172	+523
9 メキシコ	821,045	83,945
	+55,963	+4,677
10 フランス	728,745	32,679
	+120,208	+545
11 南アフリカ	694,537	18,028
	+11,295	+925
12 英国	634,924	43,018
	+104,807	+573
13 イラン	508,389	29,070
	+28,564	+1,651
14 チリ	484,280	13,396
	+10,974	+326
15 イラク	409,358	9,970
	+22,237	+439
47 日本	90,140	1,638
	+3,597	+33

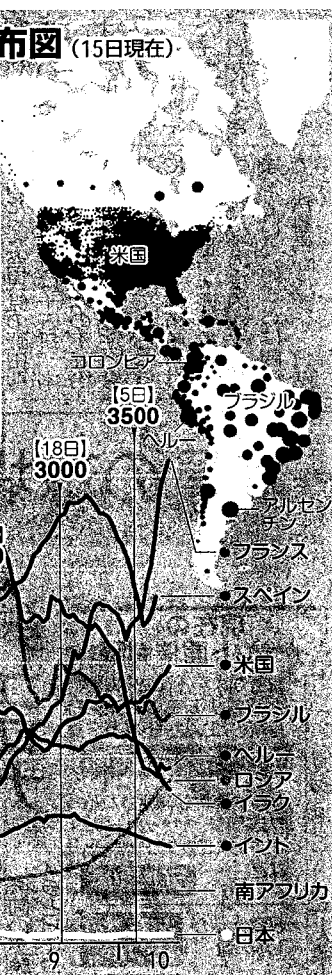
感染者総計 **38,002,699**
+2,343,692

死者総計 **1,083,234**
+38,965

※WHOまとめ。下段の+は1週間の増加数

※ジョンズ・ホプキンス大学システム科学工学センターのウェブサイトから転載

デザイン：高橋運郎



日々論々

安保法の余波

池袋暴走事故で妻子を亡くした松永拓也さん(36)の涙する姿を何度も見えた。事故から一年を迎える前、自宅での取材を終え、帰ろうとした時、「この前、外を友人と歩いていたら、元氣そうですねって言われちゃって」とぼつり。見ず知らずの

事故の悲惨さ

松永さんは分かっている。事故のことをかと思いついて、ズンと気持ち沈むが、仕事中に手が動かなくなる時があるという。そんな時、目をうつろい入る思い出す。愛してやまない人を失って心の中で伝えることが安定するそう。事故時だけに、その後の「非日常」を通して、事故の悲惨さを読者に伝えなければと感じた。

記者の胸ポケット

社会部

井上 真典 36歳



群馬県出身。2010年入社。警視庁で詐欺や贈収賄、交通事故を担当。登山が趣味で、到着した山小屋で、昼すぎからウイスキーをちびちび飲むのが至福の時間。